



楠井隆三のこと

山崎好裕

福岡大学教授(経済学部・大学院経済学研究科)

楠井隆三という経済学者のことを書こうと思う。

楠井は1899年和歌山県那賀郡池田村(現紀の川市打田)に生まれ、1991年に没した。楠井と長崎県立大学の関係は、1967年に長崎県立短期大学商英部が長崎県立国際経済大学(1991年に長崎県立大学に改称)に昇格すると同時に、「経済原論」の担当者として赴任したことである。同年関西学院大学を定年退職しての異動であった。

担当した「経済原論」はIとIIに分かれていて、I・IIとも通年でそれぞれ2年生と3年生に開講されていた。Iの方では、テキストにサミュエルソンの『経済学』(都留重人訳、岩波書店)と、佐賀出身の著名な経済学者、高田保馬の『経済学概説(新版)』(有斐閣)を用いて、専門教育への準備をするというのが目的となっていた。IIの方では、経済の分配原理を一貫して講義している。

分配原理といっても、所得分配の内容や枠組みの関係でミクロ経済学とマクロ経済学を講義しようという試みである。まず、ミクロの方では価格理論や生産理論との関係で分配を考えるとということで、利潤や利子、地代、賃金などの所得の分類が説明される。マクロの方では、国民所得についての説明が行われた後に、経済成長と所得分配の関係が述べられる。

ただし、現在の観点から見て特徴的なのは、後半部で社会主義、ないし、団体経済の分配

原理が述べられるという点である。これは当時の年輩の経済学者が、いわゆる近代経済学(新古典派理論を中心とする現代的な経済理論)とマルクス経済学を共によく論じえたということが理由の一つであるが、それだけではなく楠井の本来の研究分野と密接に関係している。

楠井の主著は1939年に有斐閣から出版された大著『理論経済学認識論』である。この書名を見ても、専門としていた分野が、経済哲学、経済学方法論、価値論(経済的価値とは何か?)などを中心とする抽象的で特殊なものであることがわかるであろう。その分、楠井は経済学全般に関する広い知識を持たなくてはならなかった。

楠井は日本における経済哲学の創始者、左右田喜一郎から大きな影響を受けたが、経済学と経済哲学が相補わなければならないこと、貨幣的關係のみならず、社会的全生産過程が経済学の対象であるべきこと、という持論を持っていた。

そもそも、筆者が楠井について知るきっかけとなったのは、戦前・戦中の外地帝国大学における経済学研究について調査したことであった。1926年、東京帝国大学大学院を修了(博士学位は1945年慶應義塾大学より)した楠井は、台北高等学校教授、台北帝国大



『理論経済学認識論』



経済学者 楠井隆三

経済新報社、1976年)) そこから得られるものを私なりに例えると、現在の金利水準ではほど遠いですが預金金利が年5%とすると、1億円を銀行に預けると年に500万円の利息がもらえます。これを逆から考えると、500万円の利息は1億円の資産から生まれるということです。あなたが働いて1年間に500万円の収入を得るとしましょう。無から有が生まれないとすれば、この500万円もまた、1億円の銀行預金に匹敵する何らかの資産から生じているはずで。この資産、すなわち労働を生み出す個人の能力を人的資本と呼びます。ベッカー教授はこの著書の中で、「健

